

日仏東洋学会通信

第八号

Circulaire de la Société franco-japonaise

des Etudes orientales, No. 8 décembre 1987

一九八七(昭和六二)年十二月発行

目次

彌永信美氏、渋沢・クロードル賞 受賞……………	1
学会事務局の移転について……………	2
一九八六年度第二回〔臨時〕会員総会報告(続)……………	2
本学会の日本学術会議登録について……………	5
第五回日仏コロックの準備状況……………	6
「十字軍」シンポジウム……………	9
彌永信美……………	9
会員消息……………	12
(住所変更・訂正、新入会員等)……………	12
編集後記……………	12

彌永信美氏、渋沢・クロードル賞 受賞

日仏会館の創立六〇周年を記念して、一九八四年に渋沢・クロードル賞(日仏会館、毎日新聞社共催)が設立された。この名称は、日仏文化の相互理解のきずなを強めるために大きな功績を残した明治の実業家、渋沢栄一翁と、駐日大使もつとめたフランスの劇作家、詩人のポール・クロードル氏の両氏にちなんだものである。

この賞は、日仏両国で相手国の文化の研究または紹介に顕著な業績をあげた少壮研究者(年齢制限四二歳)に与えられるものであるが、今年の日本側受賞者(第4回)に、本学会員の彌永信美氏が選ばれた。受賞作は、氏の『幻想の東洋——オリエンタリズムの系譜』(青土社刊)。厳しい選考を通っての栄ある受賞を、本会としても心より喜ぶたい。受賞の結果、彌永氏は今夏一ヶ月間渡仏された。

なお、ルイ・ウィントン社の好意による特別賞は、竹内信夫訳、モリス・パンゲ著『自死の日本史』(筑摩書房)の翻訳に贈られた。フランス側受賞者は *Les Cercles d'un regard: le monde de Kajii Motojiro*, Paris, Maisonneuve et Larose (『視線の循環——梶井基次郎の世界』日仏会館書架番号 vi.c 1c 10 10) を出版した国際基督教大学助教授の小玉クリスチヌ Christine 夫人。

右の三氏の受賞式と祝賀会が六月十五日に東京・毎日新聞社ビル内

のレストラン「アラスカ」で華やかに催され、選考委員や選考までのいきさつは、九月十七日（木）の『毎日新聞』朝刊に詳しく報告されている。

学会事務局の移転について

学会事務局は、日仏会館のフォワイエ気付よりも、事務局長の所属機関に移した方が良いのではないか、という提案は、昨年四月四日の会員総会で議され、承認を受けました。その理由やいきさつは、既以前号4頁に報告した通りですが、移転と事務引き継ぎに意外と手間がかかり、実際に事務局が事務局長（主幹）所属の早稲田大学文学部八階に移転を完了したのは、この九月のことでありました。

従来、彌永信美、川崎ミチコの両氏に代って、前田繁樹（早大副手、事務担当）、田中文雄（愛国女子短大講師、会計幹事）の両氏が福井文雅主幹と共に事務局の主要スタッフとなりました。それぞれ本務があつての事務局構成員ですから、不行届きの点も多いかとは思いますが、しばらくの間、宜しくお願い致します。

一九八六年度第二回〔臨時〕

会員総会報告（続）

この件も前号12～13頁で一部報告済みですが、そこで「第二回会員総会」と書きましたのは、事務局の勘違いでありました。会員総会は年一回が原則ですから、正しくは「臨時会員総会」とすべきでありました。

ただ、「会員総会」であることを強く事務局が意識したのは、来年秋開催の第五回日仏コロックについて本会が参加希望の場合には、三月末までに日仏会館学術委員会にその計画を届ける必要があります、従つて、それ以前において会員総会を開き、計画スタートの承認を得ておく必要があつたからです。

三月十一日に、早大・大隈会館一階和室で、四時から先ず評議員会が開かれ、出席者は（敬称略）、弥永昌吉、榎一雄、坂出祥伸、山本達郎、事務局（福井文雅、彌永信美、川崎ミチコ）。それに、来年のコロック代表者として酒井忠夫、羽田正（関西部会役員の代理）両会員がオブザーバー出席。議事は総会のそれと重複しますので、直ちに次の会員総会の報告に移ります。

会員総会は、大隈会館三階二号室（洋間）で五時から開催。その次第は次のようでありました。

開会の辞

榎 一雄

報告事項

事務局

一、学会本部事務局の移転について

早大からの事務経費補助金について

早稲田大学には、大学内に事務局を置いて活動する場合、事務経費および理事会費の一部を補助する制度がある。但し、同一学会に対する補助は年一回を限度とし、事務経費は年間二万円、理事会費は年間三万円を限度とする。そこで申請したところ、審査の結果、五万円の補助費が出された。これは事務局への補助費としての臨時収入であるので、学会の経常費とは別の会計として、別の郵便貯金の口座を設けた。なお、本号刊行の時点では、日仏会館からの今年度分補助金は出していない。これが出ないと、本会の会計は極めて苦しくなる。

二、日仏会館学術委員会からの伝達事項

- ① 文部省補助金による日・仏間の学者交換の申請
 - ② 日仏共同研究事業の助成
 - ③ 第四回「一九八七年度」渋沢・クロード賞「公募」
 - ④ 文化講座
 - ⑤ シンポジウム「都市に個性を」
 - ⑥ Foyer の利用「無料」
 - ⑦ テレックス、ファックスの設置
- 〔右の②～⑦につきましては、既に前号9～12頁に報告済みです。但し、⑦の日仏会館テレックスについては次の誤植があり、お詫び致します。〕

HAIFRA J → MAIFRA J

審議事項

一、日本学術会議への学会登録の件

日本学術会議から、学会として登録するための用紙が送られて来た。評議員会での討議では、メリットとして「学術会議の会員選挙に参加ができる。科研費申請の時に有利。出張費などが違う」などの点が挙げられ、デメリットとしては「事務が煩雑になること」が指摘され、結局事務が煩雑にならない範囲で、一応登録の申請をしてみる、という結論になり、総会でもその方針が承認された。〔本号、5頁参照〕

二、日仏東洋学会役員改選の件

これは昨年春四月の総会からの継続審議事項であった。その時には、「役員改選の為に規約を改正する必要があるのではないか、」との意見が出され、改正案の原案作製は事務局に一任されたのであったが（前号の1～2頁の報告参照）、その時にも既に言われていたように、今回でもまた、評議員会においても総会でも、「あまり煩瑣な規約を作るのは問題がある」「他の日仏諸学会でも役員改選の為の特別な規約を持たないところが多い（日仏理工科学会など）」「必ずしも選挙が必要なのわけではない。推薦でも良いのではないか（前例がある）」などの意見が出され、結局、総会での結論としては、

- ① 任期満了の時が来たら、（必ずしも）選挙によるのではなく、評議員会が発議（推薦）して、総会の承認によって決定する。
- ② また任期途中でも、あるいは年度途中でも、役員が辞意であった場合は、新たな役員を推薦し、総会の承認によって決定するという

日 仏 東 洋 学 会

昭和61年度〔昭和61年4月1日～昭和62年3月31日〕会計決算報告
(昭和62年3月31日現在)

取 入	
普通会員会費	183,000
前年度繰越金	54,179
日仏会館補助金	50,000
利 子	862
合 計	288,041
支 出	
印 刷 費	
①『学会通信』6・7合併号制作費	105,400
②『学会通信』6・7合併号発送費	20,400
消 耗 品 費	23,300
通 信 費	28,810
会 議 費	24,188
支 払 報 酬 費	20,000
合 計	222,098

総収入－総支出＝288,041－222,098＝65,943

昭和61年度残金65,943円は、昭和62年度への繰越金とする。

上記の如く相違ありません。

昭和62年3月31日

日仏東洋学会会計監事 池 田 温 印
日仏東洋学会会計監事 原 實 印

日 仏 東 洋 学 会 昭 和 6 2 年 度 予 算

取 入	
普通会員会費	180,000円
前年度繰越金	65,943円
利 子	800円
合 計	246,743円
支 出	
印刷費(学会通信8号製作費)	110,000円
通 信 費	50,000円
会 議 費	25,000円
消 耗 品 費	25,000円
支 払 報 酬 費	20,000円
雑 費	16,743円
合 計	246,743円

方針が好ましい。
という意見が承認された。
なお、評議員会の席上、福井主幹は辞意を表明したが、来年のコーック終了までの留任を要請された。但、彌永信美、川崎ミチコ両(事務局)評議員の退任は認められ、後任として、田中文雄、前田繁樹両会員が推薦され、承認された。
二、一九八六年度会計報告

①会計監事の実質氏が渡英中であり、また会計幹事が交替したり、『通信』第六・七合併号は八六年度の会計で処理しなければならない等の理由から、異例ではあるが、総会では決算・予算ともに案を提示するにとどめ、結果は評議員間での持ち廻り審議とし、承認されればそれを『通信』第八号で会員各位に報告することになった。
その結果が次表のようである――

②事務局長二名に対する八六年度中の報酬費は、一人三千人と予算計上されていたが、昭和六一年四月の総会での方針に従って、一人一万円（二人で二万人）とすることに決定した。

③本号発行の時点では、日仏会館からの補助金五万円は未だ出ていないので、本年度の予算内に計上できなかった。

四、一九八八年の第五回日仏ロック参加の件

A、「日中の宗教文化の交流」 代表・酒井忠夫、組織責任者・福井文雅（会場を途中で関西に移す予定で、その場合の関西での世話人は坂出祥伸）、実務担当・山田利明——酒井教授より、鋭意準備が進行中の旨、説明があった。参加者は会員中から公募。

B、「東洋学諸分野における中央アジア出土文書の研究」 代表・

羽田明、組織責任者・大地原豊、実務担当・中谷英明。羽田明、大地原豊の両氏は病欠欠席、中谷氏は渡仏中のため、羽田正氏が代理で説明し、渡仏中の中谷氏の手紙を代読した。

五、その他——山本達郎教授の発議により、彌永信美、川崎ミチコ両氏に対し長年の事務局長・評議員としての御苦労に慰労・感謝の拍手が送られた。

閉会の辞

榎 一雄

以上の総会報告は、元・書記幹事の彌永信美氏による詳細な議事録からの摘要です（文責・福井）。議事録全文は事務局に保管してありますので、御希望の方は御覧下さい。

会員懇親会が、総会閉会后、六時から、隣室の宴会場でなごやかに開かれた。山本達郎名誉会長、A・ベルク日仏会館学長、弥永昌吉、湯山明（国際仏教学研究所有長）等の諸会員のスピーチに混って、彌永信美、川崎ミチコ両元評議員の返礼の挨拶、前田、田中西新事務局員の自己紹介などが続いて、八時頃閉会。

なお、このカクテル・パーティも、早大内において開かれる総会に引き続き懇親会が行なわれる場合に、早大当局から出る規定の補助金によって実現したことを附記し、学会として感謝の意を表します。

本学会の日本学術会議登録について

三月の役員会及び総会での決定に従って、本会は新しく日本学術会議に「学術研究団体」として六月に登録申請の手続をとった。日本学術会議会員推薦管理会あての書類作製と手続きは煩雑を極め、全役員の方々に役員カードの作製などで御厄介をおかけした。しかし、そのかいあって、「学術研究団体の登録審査基準」を満たし、本年八月十九日付で日本学術会議第十四期登録学術研究団体八三六団体の一つとして認定され、九月八日付でその「通知」があった。

その後引き続き、次の事項の通知が来た。

一、関連研究連絡委員会名——「東洋学研究連絡委員会」（第一部）

一、構成員数——一一六名

一、日本学術会議会員の推薦に当たる者（「推薦人」として指名し届

け出ることができる人数の予定される数の範囲——一人以内

一、日本学術会議「広報協力学術団体」の指定

「日本学術会議の運営の細則に関する内規」(広報協力学術団体の指定) 第二九条5によれば、「会員推薦管理会が認定した登録学術研究団体は、自動的に広報協力学術団体に指定されたものとする。」とあり、本会もその一団体に指定された。この団体は、日本学術会議の活動の周知を図るとともに、各分野の学術研究団体との緊密な連絡・協力関係を維持・強化するために広報活動に協力することを、その主な目的とする。

その結果、本『通信』にも「日本学術会議だより」を、今後随時、一部分掲載したり、数回分まとめて載せることになった。その他、『日本学術会議月報』が事務局に届くようになったので、閲覧希望者は申し出られたい。

第五回日仏コロックの準備状況

第五回日仏コロック *Sème Colloque franco-japanais* は、来年一九八八年(昭和六三)十月三日(月)から十四日(土)の間に日本で開かれることになった。二十三ある日仏会館関連学会の中から、十部会が参加する予定である。

日仏東洋学会は、既報のように、第一部会(関東)「日中の宗教文化の交流」、第二部会(関西)「中央アジア諸言語写本」の二分科会を

出すことになった。その準備状況をここに報告しておきたい。

先ず第二部会 “Documents en provenance de l'Asie Centrale”

について言えば、羽田明、大地原豊両教授の発起により、大地原教授が呼びかけ人となって、今年の一月十一日に日仏東洋学会関西支部が拡大総会を開き、上記分科会設立案が承認された。その会の出席者は、大地原豊、中谷英明、羽田正、浜田正美、矢野道雄、山中一郎、吉田豊。分科会への参加予定者でありながら欠席した人は、高田時雄、武内紹人、羽田明。

日仏会館(東京)では、五月十四日(木)三時から、日仏コロック準備の為の第一回拡大学術委員会を開いたが、そこに中谷、浜田の両氏が出席して、関西支部の準備段階を説明した。第三回準備会の報告が配布されたので、次にその一部を転載する。(原文は横書きであるが、ここでは便宜上、縦で組む)

日仏東洋学会関西支部

『中央アジア諸言語写本』分科会の第三回準備会報告

一九八七年九月二七日、羽田記念館に集った日仏東洋学会関西支部有志は、一九八八年秋、京都に於て開催される第五回日仏コロック『中央アジア諸言語写本』分科会について、次のように話しあいました。

当日は、羽田明館長を始め、東京からお越し頂いた池田温、Hautes Etudes での講義を終えて御帰朝の興膳宏の両氏など十二人の出席が

ありました。出席者は次のとおりです。

池田、大地原、興膳、高田、竺沙、Durt、中谷、羽田(明)、羽田(正)、八木、矢野、吉田。

なお、榎、原、御牧の三氏からは欠席届けがありました。

議事

当分科会の企画は、周知のごとく昨年十月より、羽田、大地原両氏を中心に練られてきましたが、当日は大地原氏より、次のような現状報告と、計画案の説明があり、検討の結果概ね原案どおり承認されました。

(1)資金計画の現状と見通し〔ここでは掲載省略〕

(2)会議場と宿舎

会議場：国立京都国際会館（京都市左京区宝池）一〇四号室

宿舎：国立京都国際会館ロッジ

フランス代表ばかりでなく、東京などから来洛する日本人参加者

のためにも、併せて十室を期間中既に予約した。

(3)日程（暫定案）

十月 三日（月）午前十一時 日仏学会議開会式（東京）

十二時 フランス大使主催レセプション

午後 東京から京都へ移動

四日（火）午後 分科会開会式

（司会者） （発表者）

大地原 Calliat/Balbir

五日（水）大地原

中谷 矢野

Pinault

〃 吉田

熊本

Gignoux

六日（木）午前 羽田 明

羽田 正

午後 〃 浜田

〃 Hamilton

森安

Bazin

夕方 関西日仏学館レセプション

七日（金）午前 御牧

武内

午後 興膳 Imaeda

午後 興膳 Teboul

高田

池田

八日（土）午前 〃 Soymie

分科会閉会式

十四日（金）午後 日仏学会議閉会式（東京）

夜 evaluation/réunion

この暫定日程は、会議の頂点となるべきトルコ学、イラン学を中心

とし、その両翼に、一方ではインド学、他方では中国学、チベット学が位置するよう組まれたものである。

但し、八日(土)の日程は、別の会場で行うことも検討中である。また発表者の追加の可能性もある。

以上が私どもの計画のあらましですが、「近代以前の中央アジアを文献学的研究の対照とする、日仏両国の、ことに若手の研究者の人的交流を、しかも異なる学問領域間において計る」という、この会議の最大の目標が十分に達成されるよう、参加者各位のご尽力と、周囲の方々のご支援を切望する次第です。(一九八七・一・中谷)

さて、次には第一部会「L'Exchange culturel des religions chinoises et japonaises」についての現状を報告するならば、二年前の前回の東洋部会「道教と日本文化」への参加者が発起人となり母胎となつて、準備会は早くから発足していた。酒井忠夫筑波大学名誉教授が代表者となり、坂出、京戸、高橋、田中(文)、広川、福井、明神、山田(利)、山田(均)等が先ず集まって準備に入った(金岡照光教授病欠)。その後、榎一雄会長、山本達郎名誉会長(東方学会会長)、今枝二郎、狩野直禎、神田信夫、楠山春樹(日本道教学会会長)、興膳宏、中村璋八等の日仏東洋学会会員と、学会員以外からも、戸川芳郎東大教授(現、文学部長、中国哲学)、平井直房国学院大学教授(神道史)や、仏教系宗立諸大学の学長教名の招待者を含めて、延べ約五

〇名の参加予定者が見込まれている。第一部会の事務局は、福井、山田(利)を中核に、田中文雄、前田繁樹の四名が今のところは当っているが、次第に若手参加者が交替して当る予定である。

フランス側からの参加者は、

レオン・ヴァンデルメルシュ(フランス国立高等研究院教授、前・

日仏会館学長)

イザベル・ロビネ(エックス・マルセイユ大学教授)

カトリーヌ・デスプー(国立東洋言語文化研究所助教授)

カローリーヌ・ジス(国立学術センター研究員)

ブリジット・ベルチエ(国立学術研究センター研究員)

マルク・カリノウスキ(フランス極東学院研究員)

クリストファ・シペール(フランス国立高等研究院教授、フランス

側責任者)

右七名の発表題目は既に届いているが、この他に、同行の夫人や傍聴者も含めると、参加者は更にふえる見込みである。

会議日程は十月三日午後の第一部会開会式に始まって、七日夕方までの五日間。その後についても計画はあるが、未確定要素が多い。今の所の予定は次のようである。

国際会議の重要目的は、参加者間の直接の情報交換・個人的交流の確立と、現地でなければ得られない実地体験・見学の二つであろう。単なる研究発表だけでは、論文を読んでも足りる。そこで(前回もそうであったが)、日仏間の公私での交流を目指す。その為に、会場は

伊豆半島の会議施設付きのリゾート・ホテルにとり、参加者全員が合宿する。そういう場合の例として、参加費を若干徴収する。高原か海辺の温泉郷で、親睦を重ねながら、研究の深化をはかる。時間に余裕のない方は、全期間ではない随時参加も可能である。

会議期間中の同行来日の夫人方接待には、日本側委員の夫人達が当る。

研究会閉会後は、八・九・十の三日間、日本漢文教育学会と日本中国学会（設立四〇周年記念）が東京・大正大学で開かれるのを幸いに、希望者はそこに参加、傍聴したり、観光に出る。十一日夕方、京都でレセプション（坂出祥伸教授が世話人）。十二日に解散、以後は自由行動。希望者は、十四日昼に宮内庁書陵部で秘蔵の『道蔵』を見し、あわせて皇居・宮城内を見学。その後、六時の全部会・合同閉会式、八時の第一部会「さよならパーティ」に臨む。

右の暫定案については、十一月下旬に渡仏の山田利明氏がシベール教授と会って、更に検討する予定である。

第一部会は、立案をこの春の総会と日仏会館学術委員会に提出してから、公けに活動し始めたので、未確定事項は多い。参加者は（前回のバリと同様）、公募である。「日仏東洋学会」であるからこそ公費の援助が受けられるのであるから、参加者は学会の会員であることを原則とするが、発表テーマによっては専門家を招待する予定になっている。その他の参加希望者は、別に定める参加費を出す。会場がホテルなので、先着順などによってある程度人数の制限をするかもしれない。

い。前回のコロックでは、東洋学会の日本人参加者に若手研究者が多かったことが、会后、フランス側から非常に高く評価された事実があり、次回でも多様な参加の在り方が期待される。

◎ 「十字軍」シンポジウム

——参加を前にして考えたことなど——

彌 永 信 美

東京三鷹市の中近東文化センターで九月二六—二七日の二日間、「十字軍」をテーマとするシンポジウムが開催されることになり、筆者にもパネリストとしての参加を依頼された。予定されているプログラムは以下の通りである。

九月二六日

議長 橋口 倫介（上智大学文学部）

川床 睦夫（中近東文化センター）

歴史教育の中の十字軍 吉田 悟郎（中央大学法学部）

「アラブが見た十字軍」と日本の読者

突田口義郎（成蹊大学文学部）

イスラーム史における十字軍 佐藤 次高（東京大学文学部）

ヨーロッパ史における十字軍 宮松 浩憲（久留米大学商学部）

ビザンツ史における十字軍 渡辺 金一（一橋大学経済学部）

討論

九月二七日

議長 板垣 雄三（東京大学東洋文化研究

所）

榊山 紘一（東京大学文学部）

セルジューク朝と十字軍

清水 浩祐（東京外国語大学ベルン

ア語学科）

十字軍とアラブ知識人

梅田 輝世（梅花短期大学家政科）

十字軍と東方教会

森安 達也（東京大学教養学部）

十字軍と東方イメージ

彌永 信美（著述業）

討論

筆者はもとよりここで扱われる問題に関してはまったくの門外漢なので、最初に参加を依頼された時には非常にとまどった。しかし主催者側からのお話では、昨年暮れに上梓した拙著『幻想の東洋』（青土社）をたまたま読まれたとのことで、その内容に沿った話をすればよいということだったので、（それでも大きな危惧を抱きながらだが）お受けすることにしました。ここでは、そのための原稿を書きながら思い浮かべたことを一、二記しておきたい。

十字軍と聞いて筆者がまず思い出すのは、子どもの頃夢中で繰り返して読んだW・スコットの小説『アイヴァンホー』のことである。中世の雄々しい騎士道物語としての十字軍イメージは、おそらくこんにちでも一般の歴史観に浸透したものでだろう。しかし歴史的事実としての十字軍は、もちろんそのようにロマンティックな出来事ではなかった。純粋な信仰心といわれていたものは実は非合理的な狂信であり、

勇猛果敢な冒険心は卑小で現世的な欲望にすぎないと考えられるようになってきた。中世最大の「東」と「西」の接触は、相互理解という観点からはほとんどまったく否定的な結果しか生まなかった。十字軍とは、相手の実力を完全に無視した「ドンキホーテ的」企てであった（モンゴメリー・ワット『地中海世界のイスラム』〔筑摩書房〕）というのが、こんにちの歴史家の一般的な評価と考えていいだろう。十字軍運動自体が、ヨーロッパの自民族中心主義の最も顕著なあらわれのひとつと考えることができるが、その十字軍に関する近年の歴史観の変化は、自民族中心主義的な歴史観が克服されつつあることを意味するように思われる。

ヨーロッパの自民族中心主義については、最近盛んな議論が行われている。たとえばT・トドロフの『他者の記号学——アメリカの征服』（法政大学出版局）は、コロンブス以降のアメリカ征服をヨーロッパの自民族中心主義のあらわれとして語っているし、またE・Wサイードの『オリエンタリズム』（平凡社）は、十九—二十世紀のヨーロッパ東洋学自体が、帝国主義による世界制覇と連動して同じ自民族中心主義を展開してきたことを論じている。ヨーロッパの自画自賛から脱して「他者」の視点をも重視していこうとするこうした新しい傾向は、まことに当然なことでもあるし、また喜ばしいことでもある。そしてそのことは、こんにちのわれわれ日本人が（他の「近代化」に巻き込まれた世界の大部分の地域の人々と同様）ヨーロッパ近代の直接の後継者であることを考えれば、決して他人事ではすまない。ヨー

ロバの自民族中心主義の解明はわれわれ自身の出自の解明であるし、その批判はわれわれ自身の自己批判でなければならぬ。——しかしこうした問題を考える時、筆者には「自民族中心主義」という概念はあまりに一般的で、議論を迷路に導いてしまう可能性があるように思われる。というのは、どんな文化でもほとんど不可避的に自民族中心主義的であると考えられるし、また歴史上、極端に拡張主義的であったのも西欧に限ったことではないからである。それでは、西欧の自民族中心主義はどのような特徴をもったものなのか、西欧の拡張主義はどんなメカニズムによって生まれてきたものなのか——議論はこうした問題に集中していかなければならぬだろう。そのような方向で考える時、欠かすことができないのが比較史的な視点であると思われる。

たとえば中国の歴史を貫く「中華思想」とヨーロッパの自民族中心主義はどのように違うのか。イスラームの聖戦思想ジャハドとヨーロッパの十字軍思想とはどこが同じでどこが違うのか。キリスト教に特有なものと考えられる極端な宗教的不寛容の精神は、他の宗教（たとえばイスラームや仏教など）と比較した場合、どのような特徴をもっていると考えられるか。キリスト教の布教の精神や方法は、他の宗教と比較してどんな特徴があるか。ヨーロッパの拡張主義の原点に複雑多様な幻想的「東洋」イメージがあったとすれば、それは東アジア（たとえば中国）にもあったと考えられる幻想的「西方」イメージとどのように違うものなのか。こうして問題は限りなく拡がっていく……。

もし一般的な自民族中心主義だけが問題であるならば、ヨーロッパ

による世界制覇は、単にそれが歴史上のある時点で、他の文化より（政治的・経済的・軍事的）「力」が強かったから、ということだけで説明されてしまうだろう。しかし「力」だけが問題であるなら、それは倫理的価値ではないから、批判の（また自己批判の）対象にはならない。西欧近代の「成功」——すなわち世界の近代化——という未曾有の事態を考える時、つねに念頭に置くべきなのは、その「力」の背景にあり、かつそれを生み出した感性や思想を理解することである。比較史の方法の不用意な応用は、不毛な議論を生むだけで終わってしまうことが多い。しかし明確な問題設定をした上で、高度に学際的な議論が交わされれば、有意義な結果を期待することもできるだろう。

「十字軍」シンポジウムという真に学際的な集いが企画されることを知って、筆者の頭に浮かんだのは、このような期待が必ずしも空しいものではないかもしれないという思いだった。こうした企画を立てられた中近東文化センターに深い敬意を表するとともに、それ自体が高度に学際的な集まりである日仏東洋学会の会員諸賢にもその存在を知っていただきたく、個人的な関心を述べさせていただいた次第である。

（九月十八日 記）

会 員 消 息

山本達郎名誉会長が、東方学会の会長に就任された。

興膳宏氏は、フランス国立高等研究院（日本の大学院に相当）で一ヶ年間の中国文学講義を終えて、この夏帰国。

楠山春樹氏は、十一月に日本道教学会会長に再選された。任期二年。

山田利明氏は、東洋大学からの派遣出張により、十一月二〇日から二八日までペリに滞在。主として欧米『道蔵』研究プロジェクト班（本『通信』第五号に関連記事）本部の成果を視察し、ならびに研究会に出席、同班からの要請によって、自己の当面する研究課題の問題点と、日本の道教研究の現状とについて発表した。

○ 住所変更・訂正

鈴木まどか

和田 久徳

中谷 英明

福島仁、池田温、宮沢正順の三氏の住所変更・訂正については、前号の「会員自己紹介」欄を参照されたい。

〔京都平安博物館退任に伴なう変更〕

○ 新入会員

川本邦衛 KAWAMOTO, Kunie

編 集 後 記

○ 来年はいよいよ第五回日仏コロック（学術シンポジウム）の年です。この準備の最新情報を本号には載せたく、それを待っていました。学術会議への登録申請への回答待ち、事務局移転に伴なう事務引き継ぎ等々で、意外に時間がとられまして、発刊が遅れました。従って、短時間に印刷刊行せねばならず、早大印刷所の方々には再び御迷惑をおかけしました。その御協力で感謝致します。

○ 第三号（一九八五年三月）にも既に書きましたが、「会員消息」について事務局の知り得る範囲には限界や誤聞があります。従って、御本人から遠慮なく自己申告して来て下さるよう、改めてお願いしておきます。

○ 今年度の会員総会は、来年の三月十日前後に東京で開く予定です。改めて御案内は致しますが、秋のコロックにも関わりますので、多数の方々の御来会をお待ちします。

○ 会費納入のための振替用紙を同封させて頂きました。なにとぞ宜しくお願い致します。

○ 次号には、「会員消息」欄の一部として、会員の新刊紹介欄を一括して設けます。これまでの号でも、折りに触れて会員の新刊紹介はなされて来ましたが、それでは断片的なので、一、二年分を一括して掲載します。実は既に本号のために用意はしたのですが、頁数の関係から、また、不確かではいけませんので皆様からの直接の情報を得たく、次号に廻しました。去年から今年・来春ぐらいまでの新刊がありましたら、御通知下さい。

○ 良い年をお迎え下さい。Meilleurs Souhais pour la Nouvelle Année ! (F・F)

日仏東洋学会通信 第八号

一九八七(昭和六二)年十二月十五日発行

編集兼 日 仏 東 洋 学 会
発行者 榎 一 雄

代表 榎 一 雄

〒160 東京都新宿区西早稲田一六〇一
株式会社 早稲田大学印刷所

印刷所 電話 〇三一一〇三一一三〇八
〒162 東京都新宿区戸山一二六一一
早稲田大学 文学部八階

福井文雅研究室 気付

日 仏 東 洋 学 会 事 務 局

電話 〇三一一〇三一一四一四一
内線 七二三四八二・二三六一